様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：挑戦的研究（萌芽）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２１６０２

研究課題名（和文）江戸の神秘思想―聖徳太子をめぐる秘伝―

研究課題名（英文）Mystical Thought in the Edo Period: Secret Traditions relating to Prince Shotoku

研究代表者
曽根原　理（SONEHARA, SATOSHI）

東北大学・学術資源研究公開センター・助教

研究者番号：３０２２２０７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：日本における近世（江戸時代）の精神世界は、長く儒学と国学などの学問を基準に考えられ、仏教など宗教思想の影響力は過少評価されていた。近年、大桑斉や末木文美士などによる見直しが唱えられたが、では実際に、どのような思想が近世の宗教を支えたのか未解明のままである。本研究は近世初期の天海（1536?-1643）を手がかりとし、聖徳太子信仰や神仏習合神道を広めた『大成経』と、それを信奉した潮音道海（1628-95）や依田貞鎮（1681-1764）の思想について、資料収集と検討を行い、従来見過ごされていた思想家や著作の再発見を進めることが出来たと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　近年、近世の仏教や神道が日本思想の独自性形成に大きく関わったことが指摘されつつあるものの、徂徠（儒教）や宣長（国学）のような具体的な対象は不明確であった。本研究は『大成経』に代表される近世的聖徳太子信仰の体系を追求し、潮音道海（1628-95）や依田貞鎮（1681-1764）など代表的な思想家の著作を分析し、資料集や論集の形で新たな研究の足がかりを形成することができた。
　SDGsなど、人々の生き方や社会のあり方を見直す機運が盛んな現代においても、日本思想の伝統を塗り替えていく知的営みは一定の影響力を持ち、国際化の軸足を固める一助になると考えている。

研究成果の概要（英文）：The spiritual world of the early modern period (Edo period) in Japan was long considered based on academic studies such as Confucianism and Japanese classical studies, and the influence of religious thought such as Buddhism was underestimated. In recent years, Hitoshi Okuwa and Fumishi Sueki have advocated a revision of the theory, but it remains unclear what kind of thought actually supported early-modern religion. This research is based on Tenkai (1536?-1643) in the early modern period, and the Taisei Sutra, which spread the faith of Shotoku Taishi and the Convinatory of Shinto and Buddhism, and Choon Dokai (1628-95) and Yoda Sadashizu(1681-1764) who believed in it. I think that I was able to rediscover thinkers and writings that had been overlooked in the past by collecting and examining materials.

研究分野：日本近世思想史

キーワード：聖徳太子信仰　大成経　乗因　潮音道海　依田貞鎮　東照宮　霊宗神道　三教一致

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本思想史の研究史上で、近世は長く儒教の時代と考えられてきたが、1980 年代に尾藤正英氏や大桑斉氏などにより疑問が提出され、90 年代に H.オームス氏や W.J.ボート氏など国外でも同調する研究者があらわれた。そうした成果に立って、近年では末木文美士や西村玲氏などが包括的に議論を提出している。そうした経緯により、仏教と神道を組み合わせた神仏習合思想への注目が増しているが、理論的枠組みにとどまり、具体的な題材については手探り状態に近い。私は、天海の神仏習合思想の研究を進める中で、近世の神道界を支配した吉田神道に対抗する中で、『大成経』とその関連書が中核的な位置にあったことを突き止めた。近世思想の重要な流れについて、ようやく対象化し研究を始める段階が到来したと考えた。

２．研究の目的

本研究は、江戸時代の思想の中から、聖徳太子の秘伝として広まった『大成経』や、それにもとづく『灌伝』などの口伝書に関して、解明を試みることを目的とする。

江戸時代（　近世）は、長く儒学の時代といわれてきた。しかし近年の見直しを経て、それは実態とは異なることが明らかになってきた。従来は西洋近代の価値観を基準とし、それにつながる要素を前近代に求める中で、来世よりも現世を重視する儒教や、それに列なる合理的思考（文献実証主義の発達、流入する西洋学など）の発展というストーリーが描かれてきた。だが私は、西洋近代に与えてきた特権的な位置に疑問を抱き、各地域独自の「近世」や「近代」を探る近年の研究動向に共感する。そして、教科書に載るような僧侶や学者でなく、知られることの少ない秘伝や口伝の世界、近代的な学問体系から抜け落ちた、けれども神秘的な魅力によって受容された世界について、発掘と分析を試みたいと考える。

研究対象として、聖徳太子のイメージの近世的形成を取り挙げる。太子は、その肖像（と伝えられる）が直近の一万円札に使用されたように、誰もが知っている、日本を代表する人物と考えられていた。近年の研究でも、太子非実在説（大山誠一）をめぐる古代史家たちの論争、中世の太子伝承をめぐる文学研究（松本真輔ほか）など、次々と新たな展開が見られた。現代の高い知名度に至る前近代の歴史について、古代から中世にかけては追うことが出来る。近代についても近年、石井公成や O.クラウタなどの研究成果が出て来ている。その一方で、ミッシング・リンク的状況となっているのが近世である。羅山など儒学者の排仏論で最大の攻撃対象とされたのが太子であったためか、近世の太子信仰等は扱われることが少なく、研究史も乏しい。しかし実は、民間を中心に太子は根強い人気があり、それが近代以降につながっている。西洋近代的価値観では無視されがちだった、近世の太子信仰（前近代的な庶民信仰として、さらには淫祠邪教的に扱われた面もあった）を明らかにすることで、近世に非合理的で神秘主義的な価値観の実在したことを解明し、多様な前近代思想を実態に即して検討していきたい。

３．研究の方法

近世の聖徳太子信仰の核になるのが『大成経』である。同書は近世初期の伊勢神宮をめぐる宗教者間の勢力争いを背景として、密かに伝わった太子の教えとして擬作されたが、伊勢神宮の由緒を中傷する記述を含むため、５代将軍の徳川綱吉の時代に禁書の扱いをうけ、制作や伝播に関わった長野采女や潮音道海が処罰された。しかし、その信仰内容の魅力から、写本の形で広まり（禁じられたのは刊行のみ）、旗本や民間に受容されたらしい。心を表すのに独特の図を用いるなど、庶民教化を志向した様子も見られる。研究史が乏しく、不明の点が多いが、本研究では改めて、2 つの側面から調査・分析を進める。

第一に、『大成経』の注釈書、中でも、その教えにもとづく修行法等を記した儀式書類の収集と研究である。近年、ライデン大学教員のバウンステルス氏（M.M.E.Buijnsters）が精力的にこの分野に取り組み、次の見通しに至っている。潮音や関係者の手になる『大成経』に関する秘伝書・神事書・灌頂書が９部 17 巻あり、それを整理した『灌伝』『仮書』『実書』『竟書』各３巻（合計 12 巻）が中核的な内容を持つ。ただし、所蔵機関によって書名の異同や内容の増減があり、固定的なテキストとして扱うにはなお調査の継続が必要である。このバウンステルス氏の見通しをもとに、オランダと日本で情報交換等を行い、特に日本にいないと入手しにくい情報や、個人所蔵資料の調査交渉等を曽根原が担当し、『大成経』の教えがどのような形態で受容されたかを共同して解明していく。

第二に、『大成経』の受容や伝播に大きな役割を果たした、依田貞鎮（1681-1764）の調査である。依田は、江戸の郊外（現在の府中市）を拠点とし、民間の学者として神道思想の研究などを行い、生涯かけて大量の著作（しかも全て写本でしか伝わっていない）を残した。ほぼ同時代に『大成経』を受容した戸隠山別当の乗因（1682-1739）とは異なり、兄に寛永寺幹部となった僧侶を持ち、天台宗教団とは生涯友好的であった。輪王寺門跡（将軍の師範として位置づけられて

いた）の知遇を得た結果、８代将軍の徳川吉宗や桃園天皇にも著作を献呈したと伝えられる。依田は明らかに、『大成経』の広がりを担った中心人物であり、彼の事績や大量の著作の内容調査が必要である。事績については、東京都府中市の郷土史家である野田政和氏が近年精力的に進めている。ただし同氏は史学畑を歩んでおり、宗教思想について協力を求められていることから、共同で資料の収集と分析を進めている。関連資料は主に東京付近と東海地方に残っており、重点的な現地調査の実施を考えていたが、コロナ禍により調査旅行が困難な時期が続いたため、なお今後の課題として残されている部分も少なくない。

上記について４年間かけて調査を続け、数名の協力者の助力を得た結果、主要な成果として資料集１冊と論集１冊を編集するに至っている。

４．研究成果

（1）　研究期間中、毎年に口頭発表を行い国内外の研究者との意見交換を進めた。特に 2019 年のライデンにおける研究集会と、その後の関係する研究者との交流を経て、『書物の時代の仏教』（勉誠出版．2023 年）を編集し、現在校正中である。

（2）　関係する資料集を編集することを企画し、オランダの研究者（ボート・バウンステルス）と協力して曽根原編で『国家を守護する仏神』（同朋舎新社．2023 年．288p.）を制作している（現在校正中）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 SONEHARA Satoshi,UMEDA Chihiro,Christopher MAYO,SERIGUCHI Mayuko,HOZAWA Naohide	４．巻 30(1)
２．論文標題 Religious Transformations in Early Modern Japan: Relationships Between the State, Religious Organizations and Communities	５．発行年 2020年
３．雑誌名 International Journal of Buddhist Thought and Culture	６．最初と最後の頁 39-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　1件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 SONEHARA Satoshi
２．発表標題 The Creation of the Image of Shotoku-taishi in Early Modern Japan
３．学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 曽根原　理
２．発表標題 A Buddhist Concept of the “Land of the Kami”: The Birth of Dual Aspect Shinto in Early Modern Japan
３．学会等名 The 2nd Indonesia Japan Scientific Forum “International Symposium and Workshop on Japanese Studies”（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 SONEHARA Satoshi
２．発表標題 Tenkai, Performer of Esoteric Ritual
３．学会等名 2022 The Asian Studies Conference Japan（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 SONEHARA Satoshi
２．発表標題 Taisei-kyo and Shugendo
３．学会等名 17th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 Bernhard Scheid, Nam-lin Hur, Sonehara Satoshi ,Carla Tronu, Jacqueline I. Stone. Inoue Tomokatsu, W.J. Boot etc.	４．発行年 2021年
２．出版社 Bloomsbury	５．総ページ数 304
３．書名 Religion, Power, and the Rise of Shinto in Early Modern Japan	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
オランダ	ライデン大学			